

<p>福島大学附属図書館報</p> <h1>書 燈</h1>		<p>No.24</p> <p>2000. 4. 1 発行</p> <p>〒960-1293 福島市松川町浅川字直道2 TEL (024) 548-8083 http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/</p> <p>福島大学附属図書館</p>
--------------------------------	--	---

ユーザーが幸せを感じる図書館とは

館長 箱 木 禮 子

<インターネット時代来たる>

図書館は本学でももっとも電子化の影響を受けた部局であろう。ユーザーが図書館で最初に出会う電子機器が図書検索用のコンピュータである。私が福島大学で初めて出会ったコンピュータは森合キャンパスにあった。ほとんどプレハブのような電算室には本体とプログラムを読み取る機械が据えてあった。当時のプログラムは3センチ位の幅の紙テープに大小の穴をパンチして作った。達人になると、ピンク色の紙テープの穴の位置を見るだけでどんなプログラムかわかったようである。そのテープを読み取り機械にかけると、シュッシュッと音を立ててテープが巻き取られていくのだが、時々何かに引っかかって止まってしまうことがあった。すると電算室の主である某先生が足でその機械をけとばすのである。すると機械は不思議とまた動き出すのだった。

紙テープを使うコンピュータの次は、カードにつけた印でプログラムを読み取らせる大型コンピュータだった。その道のプロの研究室を訪ねると、数十センチにもなるカードの束が書架に並べられていたものである。しかし間もなくフロッピーディスクが普及し、コンピュータも小型化されて、今のようなパソコンの時代となり、それがつなぎ合わされて大量の情報が瞬時に世界を駆けめぐるインターネット時代となった。技術革新のスピードとその影響のすごさを実感する出来事であった。

古いコンピュータに記録された情報は、それにふさわしい読み取り装置がなければ内容を知ることができない。そこに大切なアイデアが入っていたとしても、読み取り装置なしではそれを取り出して人間の五感に訴える情報とすることができない。図書館を電子化していく際には忘れてはならない課題である。

コンピュータは便利な道具である。ものによっては人間の先生に教わるよりコンピュータに教わった方がよく覚えられるものもある。こうした学習の便利さを初めて知ったのはニューヨーク大学に8か月の私費外地研究に行った時である。図書館の検索は1986年当時すでにコンピュータ化されており、耳で聞く英語で何か教わることが大変だった私には、コンピュータが教えてくれる図書館利用法はありがたく、おかげで好きなだけ本を捜したり読んだりすることができた。



現代はインターネット時代である。パソコンに電話線をつなげば瞬時に世界中の情報を手に入れることができる。しかしパソコンさえあれば本は不要だ、ということにはならない。300ページの本を読むことはものにもよるがそれほど苦痛ではない。だがパソコン画面で300ページ読むことはとても無理である。きつと頭痛でダウンするだろう。画面を読まずにプリントアウトする方法もあるが、300ページのプリントアウトは大変である。紙や書籍の形をした情報にはそれなりの使いみちがある。パソコンの利便性と書籍の利便性は補完的なものであって上手に使いこなすことが必要である。

<文字情報を使う・作る>

最近「18歳のころ何を讀んだか」という質問を受けた。いろいろな小説や随筆が頭に浮かんだが、ひとつ忘れられない読み物があった。それは森鷗外の「寒山拾得」という短編小説で、高校の国語の教科書に載っていたものである。その当時、この小説のエッセンスがどうしても理解できなかった。これが

理解できたのは20年後に禅の体験をした時である。また、これぞ名文、というものもある。柳田国男の『遠野物語』の序文は名文に値するのではないだろうか。読んで役に立ったという本もある。梅棹忠夫の『知的生産の技術』である。この中に、文章をつづるための技術としてKJ法を改良した「小ざね法」というものが紹介されている。文章を組み立てていく際に、まずブレンストーミングのように思いつくままの断片的なアイデアを小さなカードに書き出し、それを大量に作って整理していき、文章のアウトラインを作るというものである。本稿も実は「小ざね法」によって書かれている。この方法を学生に教えるのだが、教え方が悪いのかいまだに使い手が現れない。

本を情報源として使う場合、書き込み、線引き、折り込みなどがよく行われる。図書館で古い論文などを引っ張り出してみると先人たちの書き込みを見

つけることがある。皆が利用する本に勝手な書き込みをされては迷惑だが、反面、コピー機械もなく、十分に本を買うこともできなかった昔の人の苦勞が理解できる。本を読むのは知識を得るためであることが多いが、研究にとっては、「読む」の次に「考える」、そして「書く」という作業が不可欠である。そして、その中で最も大切でありながらもっとも理解されにくいのが「考える」である。だが、「沈黙考」が何より大切なのだ。こうしたユーザーにとって有難い図書館とは何か。それはウインドーショッピングできる図書館かもしれない。書き込みをしたりぼろぼろになるまで読む本は自分で買うべきである。しかし買うには至らないが少しの間手元に欲しい本、参考文献として目通しすべき本、新しいテーマの本、未知の分野の本、こうした本を舌なめずりをしながら物色できる図書館があったならたいいていのユーザーは幸せを感じるだろう。

思い出の一冊 植村直己『北極点グリーンランド単独行』文芸春秋.1978

教育学部4年 角田 直之

この本に出会ったのは中学生のときだった。時間も忘れて、授業中も夢中になって読みつづけたことを覚えている。当時本が好きでなかった私にとって初めての経験だった。

大学4年生になり就職試験が一段落した今年の夏この本を再び読んだ。同じように、夢中になって読みいった。今回、夢中になった理由は植村直己氏に共感したからだと思う。普通の冒険家ならば、自分の冒険を美談のように書いてしまうかもしれない。しかし植村氏は冒険中の気持ちを正直に表現している。橇を引く犬が思い通りに動かない不満、自分に対するいらだち、冒険をやめようとする気持ちとの葛藤、などである。植村氏の人間らしい弱さ、苦しみをひしひしと感ずることができる。そんなとき、多くの友人が助け、励まし、植村氏は冒険を完遂することができた。これは私の大学生活の姿と当てはめて感じてしまう。私は、進路や勉強など多くのことで悩んだとき、友達・先輩など多くの人に助けってもらったと感ずる。植村氏は何の迷いもなく、自分が決めた目標に突っ走る、私の手の届かない



ような立派な冒険家と想像していた。しかし、植村氏も私と同じ人間であり、悩み、苦しみながら生きているのだと思い私も何か勇気づけられたような気がした。読んだときは、自分の進路に希望が持たず、落ち込んでいたときだったのでなおさら勇気づけられた。

これは大学生の今だから受ける感動であり、中学生のときなぜに夢中になって読んだのか今にはわからない。ただ、当時強く心に残っていることは、この本を読んでいるときに、植村氏が死んでしまった話を先生から聞かされたことだ。ショックだったと同時に、雪山での遭難ならば、どこかで生きているのではないかと本当に思った。中学生の私にとって「死」というものがとても大きなものだったからこそ、この本が強く印象に残ったのかもしれない。

中学生と大学生で同じ本を読んでも受ける感動はまったく違うと思う。しかし、どちらでも私に深い感銘を与えてくれ、かつ、何度も本を読む楽しさを味わわせてくれたこの本は私にとっての「思い出の一冊」です。

ドイツのヴッパタールに暮らしてみて

行政社会学部 神戸 秀彦

私は、1997年の4月から、1998年の3月までの1年間、文部省の「海外研究開発動向調査」(2カ月、その後10カ月延長)のため、ドイツのヴッパタール市に滞在した。ヴッパタール市の名前は、日本では余り知られておらず、9割方の日本人は知らない。デュッセルドルフ市の東(特急電車で約20分)で、ケルン市の北東(特急電車で約30分)といえはわかる。あるいは、最近、ヴッパタール市の中心部を走る懸垂式のモノレールが落ちたところ、といった方がわかるかもしれない。

このヴッパタール市には、ノルトライン・ヴェストファーレン州立の環境問題の研究所がある。名前をヴッパタール気候・環境・エネルギー研究所という(組織上は法人形態である)。所長は、日本でも有名なりヒャルト・ヴァイツゼッカー元ドイツ大統領の甥にあたるエルンスト・フォン・ヴァイツゼッカー博士である(その後、連邦議会議員選挙により、社会民主党の議員となった)。この人の書いた「地球環境政策」の翻訳書(宮本・楠田・佐々木訳、有斐閣)が、94年に日本でも出版され、話題となり、研究所の名前が広く知られるようになった。

この研究所には、全部で4つの部門—気候部門・物流および構造転換部門・エネルギー部門・運輸部門があり、主に自然科学系の研究者で構成される各10人位ずつ計約50人の研究員がおり、それぞれがチームを組み、プロジェクト研究を行っていた。創立は91年で、私が訪れた当時、まだ創立6年目の若い研究所で、メインの建物も建築中であり、研究室はビルに間借りをする状態であった。

そのような事情から、図書館といっても、やや大きめの図書室が1つあるだけだった。それでも、約1万6千冊(95年当時)と4人の職員を有し、私の滞在中に部分的に完成したメインの建物に引っ越しをしていったが、図書室の蔵書も、上記の4部門に分かれて良く整理されていた。ここには、ドイツ圏だけでなく、世界中の環境問題の文献も揃えられており、私の知る日本人の研究者の文献(ただし英文)もあった。何回か、図書室の秘書の方や研究員・研究所に助手として通う学生の手を煩わせたが、次第に限界を感じ、同じ市内にあるヴッパタール大学の行政法のブランド教授に連絡をとり、教授の好意で、特別閲覧証を発行してもらって、同大学の図書館を利用させてもらうことになり、結果として、こちら

に度々足を運ぶこととなった。

私の関心の一つは、ドイツの環境法、ことに廃棄物法にあった。既に日本でも相当紹介され、日本の包装容器廃棄物法立法当時に参考にもされた民間のデュアレス・システム・ドイチュラント(DSD)社によるゴミの回収・処理システムに関して、より突っ込んだ資料が欲しかった。また、リサイクルという発想を一步進め、ゴミの発生の回避という考え方にたった循環経済法にも関心があった。

ヴッパタール大学は、国立(ドイツの大学は若干の例外を除き国立)で、人文科学・社会科学・理工系を含めた14の専門分野からなる総合大学である。ヴッパタール中央駅からバスで10分位の丘の中腹にある。25の講義室と図書館・研究室・事務室を含む21もの建物群(最高17階)と、大学ホール・学生食堂・学生寮・駐車場などを有し、大学の真ん中を路線バスが通過する大きな大学である。

図書館は5階からなり、その内の第2階に柵のついた入口があり、閲覧証を提示して通過する。内部は、完全な開架式であり、学生でも、書庫の中に自由に出入りできる仕組みになっている。入口のすぐ先には、新聞の閲覧コーナーがあり、上の階には、閲覧席があるが、書庫との境は全くなく、とにかく入口を入れれば、中の移動は全く自由であった。また、書庫に隣接してコピー室があり、廊下をふくめ、コピー機が約10数台設置され、学生達は、コピー・カードを購入して、せっせとコピーに励んでいた。私も、日本では入手困難と思われる学位論文(ただし出版はされている)を発見して、悦に入りながら、ひたすらコピーに励んだ。図書の検索も、書庫の中のコンピューター(約20台)で行う。

なお、ドイツ・EUでは、日本に比べ、資料収集の壁は低く、サービスが厚いというのが私の印象だ。ボンにある連邦環境・自然保護・原子炉安全省の資料室も訪れたが、職員が丁寧に対応してくれ、検索を手伝ってくれた(外国人だからか?)。また、ルクセンブルクのEU裁判所に、必要な判決文のコピーを手紙で依頼すると、即座に送付してくれ(ただし有料)、足りない分は、ドイツのこの大学にあると指示してくれる。しかも、それが遠隔地の大学であれば、手紙さえかければ、判決文の入力されたフロッピーを送付してくれるのである。

文字のない生命は死である 前館長 長尾 光之

附属図書館エントランスロビー・カウンター上の壁にグリーンの文字が弓形にかかげられています。

“Vita Sine Litteris Mors Est”

これはラテン語の文字で、日本語に訳すと「文字のない生命は死である」となり、文字や書物の重要性を指摘し、学生諸君をはじめとするみなさんが、大学図書館に親しんでもらうことを呼びかけています。

これは古代ローマの哲学者・文人であるセネカの残した言葉です。

セネカはスペインのコルドバに生まれ、ローマで修辞学・哲学を学びました。なかでも、とくにストア派哲学者の影響を受けました。財務官として政界

入りをし、のちの暴帝ネロの教育係も担当しました。公職を離れたあとにはローマ近郊の別荘で著作に専念しました。この間、『道徳書簡』20巻を書きました。この書には彼の全英知がやさしい文体で述べられています。

セネカの哲学的著書は16～18世紀に広く愛読され、とくにモンテーニュには強い影響を与えました。彼は論理学や自然研究よりも倫理に強い関心を寄せ、とくに死にたいして人間がとるべき態度に大きな関心をはらいました。そのほか、戯曲をも書き、後世のラシーヌやシェイクスピアなどに大きな影響をあたえました。



学内教官著作寄贈図書を紹介

『独立行政法人 ― その概要と問題点』

(日本評論社、1999年11月)

●編者 福家 俊朗 (名古屋大学大学院教授)

浜川 清 (法政大学教授)

晴山 一穂 (福島大学教授)



「独立行政法人というのは一体何だろう?」「はたしてそれは国民にとって利益をもたらすものなのだろうか?」「独立行政法人」というこの奇妙な言葉を最初に耳にした時、おそらく多くの人はこのような疑問をもったことでしょう。それにもかかわらず、来年の1月から86もの国の機関・事務が

59の独立行政法人に切り替わろうとしています。

本書は、このような多くの人々の疑問に答えることを目的にして編纂されたものです。全体は、解説編と論文編と資料編の3部構成ですが、50近い項目からなるFAQ (Frequently Asked Questions: よく出される質問) によって独立行政法人という制度の概要、背景、問題点、国民生活への影響などを解説した第一部をまず読むことを、お勧めします。また、もう少し理論的に掘り下げて考えてみたいという人に対しては、第二部の論文編が用意されています。国立大学の独立行政法人化が大きな問題になっている現在、大学関係者にとっても参考になる本と思われます。

(請求記号324.1/F73d 学内刊行物コーナー)

その他の学内教官著作寄贈図書リスト

書名	出版社	出版年	著者	請求記号	所在
蝦夷と東北古代史	吉川弘文館	1998. 6	工藤 雅樹	212 / Ku17e	学内刊行物コーナー
東北考古学・古代史学史	吉川弘文館	1998.12	工藤 雅樹	212 / Ku17t	学内刊行物コーナー
生きがいの本質	PHP研究所	1999. 3	飯田 史彦	159 / I26i	学内刊行物コーナー
プレイクスルー思考	PHP研究所	1999.11	飯田 史彦	159 / I26b	学内刊行物コーナー
生きがいの言葉	PHP研究所	2000. 1	飯田 史彦	159 / I26i	学内刊行物コーナー
南北朝動乱と王権	東京堂出版	1997. 7	伊藤 喜良	210.4 / I89n	学内刊行物コーナー
後醍醐天皇と建武政権	新日本出版社	1999.10	伊藤 喜良	210.4 / I89d	学内刊行物コーナー
個と行為と表象の社会学	創風社	1999.12	加藤 眞義	309.3 / Ka86k	学内刊行物コーナー

学内ネットワークを利用した文献複写申込みについて

～希望者は利用申請をお願いします～

学術情報係

図書館サービスの一つとして、他の図書館から文献コピーを取寄せたり図書の借受けを依頼したりするものがあります。このサービスを申込みの場合、通常は「文献複写申込書」あるいは「相互貸借申込書」をカウンターに提出していただいています。

本館では、新図書館システムを導入したことで、学内ネットワークを利用して文献複写の申込みを行うことが可能となり、昨年度から試行として実施してきました。これは、図書館ホームページから「複写依頼」に入り、画面入力をして送信すれば依頼OKとなるものです。研究室に居ながら文献複写の申込みができる大変便利な機能です。運用は当面教官のみとし、メールアドレス等の把握のため、利用希望者には申請をお願いしてきました。申請を受付けると、担当係からID、パスワードと一緒に利用マニュアルが教官へ送られ、その時点から利用可能になります。

平成11度の利用状況は、申請者約60人、利用件数は約550件でした。従来の申込書による方法を含める教官からの総申込み件数は約1,700件となっており、ネットワークを利用した申込みはほぼ3分の1の利用率となりました。紙に手書きする方法と画面に入力する方法では、画面入力の方が手間がかかるとは思われますが、図書館に足を運ぶことなく依頼ができるというのはネットワーク利用のメリットでしょう。もちろん図書館にお出でいただくのが一番ですが・・・。

このサービスを利用希望の方は、昨年同様利用申請をしていただきたいと思います。有効期限はありませんので一回だけの申請でけっこうです。(昨年度申請し利用している方は再度の申請は必要ありません。) お名前、所属学部(センター)、電子メールアドレスを記入の上、「ネットワークサービス希望」と書いて、gakujo@lib.fukushima-u.ac.jpまでメールで送ってください。また、利用対象は今年度も教官のみとします。(注意：一般のE-Mailでの申込みは受け付けていません。かならず、図書館ホームページ中の複写依頼画面によって依頼してください。)

The screenshot shows a web browser window with the URL <http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/>. The page title is "複写依頼" (Request for Copying). The form contains the following fields and instructions:

- 図書館の担当者に複写依頼を行います。入力者と申込者が異なる場合、申込者IDは実際の依頼者のIDを入力してください。
- タイトル、著者、出版社、ISSNを入力してください
- 利用者名
- 申込者ID: 23456789
- 支払区分: 校費 私費
- 複写区分: 電子複写 マイクロフィルム
- 発送区分: FAX 速達 普通
- ISSN: []
- タイトル: []
- 論文タイトル: []
- 著者: []
- 巻冊次: []
- 出版社: []
- 出版年: []
- 複写開始ページ: []

CD-ROMサーバの設置

学術情報係

CD-ROMサーバは、複数のCD-ROMを装着して、いつでも(24時間稼働可能)どこからでも(ただし契約との関係で学内限定)ネットワークを通してCD-ROMが利用できる装置です。さらに複数の利用者が同時に同じCD-ROMを利用することもできます。本館では、昨年度購入予算が認められ3月に

サーバを設置しました。4月から稼働に向け調整を行っています。本館には100種を超えるCD-ROMが所蔵されていますが、その中で利用頻度の高いものについてはこのサーバに装着して便利に利用できる環境を作りたいと考えています。詳しくは次号にお知らせします。



図書館のカウンターに座ってもう一年がすぎました。カウンターの仕事というのは、ただ座っているだけのものと思っていましたが、これが案外忙しいものでした。

請求された本を閉架から探してくる時などは、何度往復しても見つからず、先輩や職員の方をお願いすることになってしまい、時間がかかることも多かったです。

また、不慣れなときはCD-ROM検索や相互貸借などの手続きを混乱してしまったりしてしまうこともありましたが、慣れてくればやはり仕事、自分にとって得るものが大きかったです。

図書館のカウンターに座って、一番感じることはやはり利用者のモラルの低下、意識の低下ということではないでしょうか。

友達と偶然出会ったり、あるいは必要なことを話したりすることはよくあることです。だとしても、その

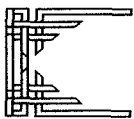
話が長引きそうだったり、笑い声が上がりそうなときはロビーに出ることは最低限のマナーではないのでしょうか。もちろん携帯電話やPHSはバイブにしておくことも当たりまえです。

あるいは、飲食厳禁となっているところに、食べ物や飲み物のごみを置いていくことなども考えられないことです。

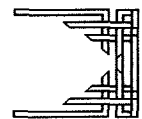
もちろん本当に一部の利用者だけですが、その一部が際だって見えてしまうということも実感されました。

自分がいろいろな場所を利用する際に、本当にささいなことであっても、実は周囲やその従業員に迷惑を掛けているということを再確認し、これからの社会生活への糧としていきたいと思っています。

最後に、図書館はフルに活用してこそその学生生活ではないでしょうか？



平成11年度 図書館業務報告



* 新入生図書館ガイダンス (4～6月)

新入生全員を対象として、教養演習単位毎に図書館内を案内しながら利用方法等のガイダンスを実施した。

* ネットワークを利用した文献複写申込 (4月)

図書館ホームページから図書館への文献複写申込みが可能となり、教官を対象として受付を開始した。

* 文献調査法入門講座 (7月)

レポート作成のために必要な文献や雑誌論文の検索法などの入門講座を、全学生を対象として2回に分けて実施し、37名が参加した。

* ホームページを充実 (8月)

図書館のホームページを改訂し、リンク等を追加することによって内容を充実した。

* サイン計画 (10月)

"Vita Sine Litteris Mors Est" (文字なき生は死なり) というデザイン文字を図書館エントランスロビー正面の壁にかかげた。全学のサイン計画の一環として実施。

* 稀覯書展 (10月)

福島大学創立50周年記念事業の一環として、10

月29日～11月3日までの期間で本館が所蔵する西洋古版本・郷土資料等の展示会を一般市民を対象に開催した。

* 図書館利用証と学生証・職員証との一体化 (11月)

学生証・職員証の磁気カード化により、図書館利用証との一体化が実現し、利用証発行に係る業務の簡素化が図られた。

* 図書自動貸出返却装置の本格稼働 (11月)

5月から試行的に運用を開始していたが、図書館利用証と学生証・職員証との一体化により、本格的に稼働を開始した。

* OPACの漢字検索が実現 (11月)

本館が所蔵し、電算機に登録された図書については、書名はもちろん、書名中に含まれる単語からも漢字検索が可能となった。

* CD-ROMサーバを設置 (3月)

サーバの設置により、ネットワークを利用したCD-ROM検索が可能となります。

* 事務機構の再編 (平成12年4月)

事務の一元化・集中化に伴い、図書館では総務係と資料受入係を統合し、新「総務係」として業務を開始した。

図書館データベースの現状

情報管理係

○機械検索可能なデータは今のどのくらいあるか

附属図書館には、現在（2月末）約71万冊の蔵書数があります。その内訳は、図書約61万冊、製本雑誌約10万冊となっています。

雑誌の所蔵内容は、ほとんど検索可能で、ごく最近の入荷状況まで検索できます。

図書については、現在下表のような入力状況にあり、既に対象数の約76%が検索可能になっています。表にある1976年度以降受入した資料は、そのほとんどが検索可能になっています。

○遡及入力作業はどこまで進んだか。

平成4年より開始した遡及入力作業（※①）は、現在1975年度以前の資料を作業しています。既に旧経済分館時代（1949-1975）の和書を終え、教育分館時代の和書を入力しています。表にある未登録分（23.8%）は、教育分館時代の残り分と両分館時代

の洋書がそのほとんどです。

○検索がさらに便利になりました。

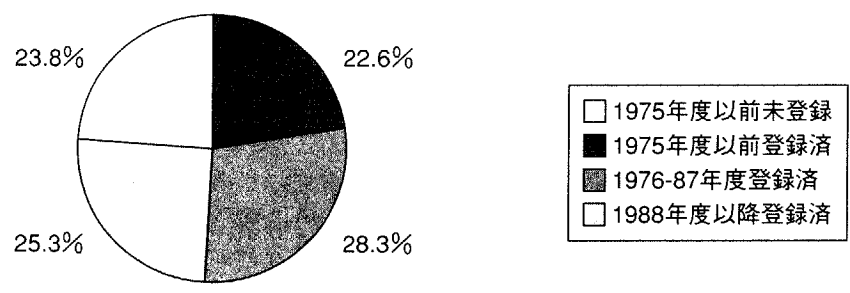
旧図書館システムではできなかった、漢字からの検索が可能になりました。また、キリル文字の入力、出版社からの検索もできるようになりました。

新図書館システム移行後（平成9年度）、これらの検索が可能なのは、新しく入力するものに限られていました。昨年11月までに検索語を新たに作成し直す作業を終え、旧図書館システム時代に作成した資料についても同様の検索を可能にしました。この作業では、同時にそれまであった検索語数の制限をもなくすことになり、タイトル中から作成される検索語の数が飛躍的に増えました。

※① 遡及入力作業とは、図書館電算化前の資料で日録カードにて所蔵内容を表していたものを機械検索可能にするための作業です。

対象数613,454冊（平成12年2月末現在）			
データ未登録 23.8%	データ登録済 合計467,693冊 76.2%		
1975年度以前未登録	1975年度以前登録済	1976-87年度登録済	1988年度以降登録済
145,761	138,554	173,775	155,364
23.8%	22.6%	28.3%	25.3%

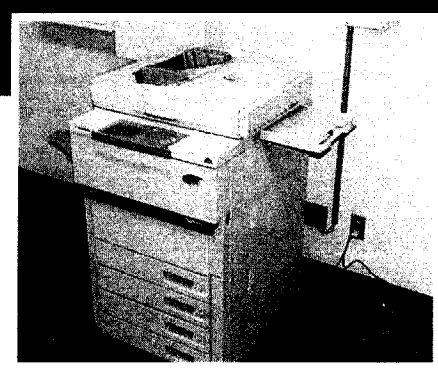
図書館データベースの現状



複写機の更新

情報サービス係

書庫入口に設置してある研究用複写機2台を更新しました。そのうち1台には、原稿を自動で送る自動反転原稿送り装置がついておりますので、レポートの複写が多い大学院生にとっては、複写の手間や時間を大幅に短縮できることになりました。複写の際には著作権の遵守をお願いします。



好評だった稀観書展

福島大学附属図書館稀観書展報告

本学創立50周年記念事業の一つとして、本館所蔵稀観書展を市内の中心地福島テルサ4Fギャラリー(上町)を会場に、平成11年10月29日から6日間にわたって開催いたしました。

展示場には、本館がこれまでに収集したもののうちから、選りすぐった96種181点(内訳:図書101点 漢籍16点 和本33点 文書14点 雑誌6点 肖像画5点 ノート 日誌 写真帳 掛絵 絵図 カードケース 各1点)の稀観書・資料を陳列しました。地域住民にとって関心が高い郷土資料、本学の歩み分かる前身学校資料も展示しました。

開場を待ちかねるように来られた方もあり、また福島市内の人が多くなか、北海道、東京などの遠方からもご来場いただきました。公務員、教員、会社員の順に多く、図書館員も7人見えました。男性は主に40~70歳代の人が多く、女性は男性に比べて少なく、30~50歳代が中心でした。11月1日は1Fで創立50周年記念式典・講演会があり、元教官・職員がなつかしい顔々を見せてくれました。2・3度と通われる人もあり、来場者の総数は約300人でしたが、本学学生はわずか数人というさびしさでした。

それぞれに比較的長時間、興味深く、熱心にご鑑賞でした。なかでも、『国富論』(スミス原著及び仏訳初版)、十七史、和算書、北斎の絵手本と北斎伝、今野源八郎先生旧蔵書、会津戊辰戦争関連資料、『宝永二年福島町之図』、磐梯山噴火状況実地調査書等、ゲーテンビー教師のノートなどに人気がありました。多くの人が最も興味深くご覧になられたものは、「大塚文庫」からの展示図書と『百科全書』でした。

「大塚文庫」とは、平成9年春、本館に寄贈された故大塚久雄氏の蔵書約6,000冊(その他 雑誌 抜刷ノート 原稿など)のことで、今回はそのうち、何度もくりかえして徹底的に読み・書き込まれてボロボロになった、M.ヴェーバー、K.マルクス、J.アンウィンなどの書物を一部開いて展示しました。その

「草編三絶」ぶりには多くの人が感嘆していました。

ディドロ、ダランベール編『百科全書』は、その重厚な装丁とポリーム(全35巻、41×27cm)で来場者を圧倒しました。また、何人かは精緻な銅版図版に魅せられていたようでした。本館所蔵本は、パリ版ではなく、J.ラフによる詳細な両版の異同研究書との照合によって、ジュネーヴ版であることが今回明らかになりました。



本展示会について、来場者にご意見・ご感想をお聞きしました。「すばらしいものばかりで感動しました」などの外交辞令に混じって、「毎年続けてください」「これらのものが現在どのように教育・研究に活用されているか興味あり」などドキとするものがありました。

全般的な満足度をたずねましたら、「大変よかった」「よかった」が合わせて8割弱でしたが、古典のわきに、肖像や簡単な解説文を付けるなど、キャプションに一工夫が必要だったようです。

展示物の一部を除いて、直接手を触れて見ていただきましたが、それはたいへん喜ばれました。ある1冊本の古書価が1,300万円であることを後日知りました。「知らぬが仏」とはよく言ったものです。

学長をはじめ展示委員会のみなさま、選書、解説文執筆をお願いした先生方、事務局会計課のご協力まことにありがとうございました。

(渡辺武房 図書館専門員)

目次

- ・ユーザーが幸せを感じる図書館とは…箱木禮子(1)
- ・思い出の一冊……………角田直之(2)
- ・ドイツのヴァッパタールに暮らしてみても…神戸秀彦(3)
- ・文字のない生命は死である……………長尾光之(4)
- ・学内教官著作寄贈図書の紹介
 - 『独立行政法人』……………晴山一穂(4)
 - その他の学内教官著作寄贈図書リスト……………(4)
- ・学内ネットワークを利用した文献複写
 - 申込みについて…学術情報係(5)
- ・CD-ROMサーバの設置……………学術情報係(5)
- ・カウンターの内側から……………円谷晴寿(6)
- ・平成11年度 図書館業務報告……………(6)
- ・図書館データベースの現状……………情報管理係(7)
- ・複写機の更新……………情報サービス係(7)
- ・好評だった稀観書展……………渡辺武房(8)